

翡翠の瞳に魅せられて

H. akua

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「お願い……どうか私を、一人にしないで！」

純粹無垢な少女と、その少女に召喚されてしまった偏屈な悪魔さんの物語。

目次

第五話	19
第四話	15
第三話	10
第二話	5
第一話	1

第一話

舞台は今より数百年をさかのぼった、近世ヨーロッパ。

政治の中心が貴族から民衆へと移り、同時に工場の煙の臭いが町中に漂い始めたころ。

とある邸宅の地下室で、悪魔召喚の儀式が行われようとしていた。煉瓦造りの床に描かれないびつな魔方陣。その周りに並べられた蠟燭の炎で、真ん中で膝をつく黒いローブの人物の姿が暗闇に浮かび上がる。

ローブの人物は、胸の前で固く両手を握り合わせた。

「…お姉ちゃんが亡くなってから、皆変になってしまったの。

パパやママは昼も夜も嘆いてばかりで、私のことなんて気にもとめない。使用人たちも悲しみに沈んで、まるでこの家だけに世界の終わりが来たみたいよ！

私、毎日寂しくて……つらくて……」

悪魔召喚、という言葉の印象からはあまりに遠い、震えるような、今にも消えてしまいそうにか細い声が地下室の闇に吸い込まれていく。

「お願い、どうか私を……私を一人にしないで！」

声を振り絞って叫ぶ、その頬から落ちた涙の雫が床を湿らせるのと同じ時——

「いいだろう。その願い、確かに聞き届けた！」

地の底から響くような声と共に、魔方陣から黒い霧が吹きだした。

あつげにとられたように尻もちをつくローブの人物。

その視線の先で空気が渦を巻き、夜の闇よりも深い黒が、すすけた天井を塗りつぶしていく。

闇の中で頼りなげに揺れる蠟燭の光が、黒い霧の中に見え隠れする紫の球体と、金色の鳥かごを照らした。

紫の球体——悪魔の眼球がぎよろりと蠢く。冷たく感情のない声が響いた。

「我が名はアモン。強欲と富貴を司る者也。私を喚んだのは君かね。」

自分の頭よりも巨大な瞳が目の前に迫り、僅かに肩を震わせた召喚者は、初めてフードを取ってその素顔を晒した。

アモンの瞳に映ったのは、緩やかにカールした金髪を花飾りでとめた年端もいかぬ少女だった。肌は一度も外に出たことがないかのようによく、黒いローブの下からフリル付きのワンピースドレスの裾が覗いている。首元に十字架のネックレスをぶら下げ、あどけない両手で分厚い魔導書を抱える姿は、さながら天使が魔女の仮装をしているかのような奇妙さだ。

それでも、その翡翠色の双眼だけは、決して臆するまいと悪魔を見つめ返していた。

アモンは何も言わないまま、黒い雲のような体で少女の周りを漂いながら、値踏みするようにその姿を眺めている。少女は黒い霧が体にまとわりつく感覚に、石のように体を緊張させて棒立ちになっていた。

「名前。」

「……えっ?」

だから、ようやく沈黙を破ったアモンの言葉にも、すぐには反応できなかつた。

「君の名前はなんだと聞いている。」

淡々と繰り返される質問に、ようやく自分が何を言うべきか理解する。

「わっ、私はマリア。マリア・ハリントンよ。」

よろしくね、悪魔さん。」

そして友好の印として握手をしようとするが、相手に手がないうちに気づくと手をひっこめる。そして、せめて精いっぱい笑顔でその気持ちを表現することにした。

突然満面の笑みになったマリアに不可思議そうにしていたアモンだったが、しばらくしてまた声が響く。

「まあいい。…しかし、お粗末な召喚者もいたものだ。」

私を一人にしないで…だったか? あんな隙だらけの願いを悪魔に向かって口にするとは。」

「え……と。どういふこと?」

アモンの目がじろりとこちらを向く。アモンに口は無かったが、この悪魔がとても深いため息をついた気がした。

「願いの内容が大雑把すぎる。要は君が一人にさえならなければいいのだからな。あれでは悪魔のペットにされようが、地獄に持ち帰られて死者の兵団に仲間入りさせられようが文句は言えん。」

「っ、そんな……それなら、言い直し——」

「一度言った願いに変更は認められん」

必死の叫びをにべもなく切り捨てた悪魔アモンは、ちらりとマリアの顔を見る。

そして、その表情に初めて恐怖と呼べるものが浮かんだことを確認すると、初めてかすかに目を細めた。

「…話が逸れたな。ともあれ、願いを言い終えた時点で、それをどう解釈し、どうやって願いを叶えようが私の自由だ。また、私は自分の能力の及ぶ範囲で君の願いをかなえるが、対価として契約完了後に君の魂を頂戴する。そのネズミのように小さな脳髓に、それくらいの知識は詰め込んであるだろうな?」

黒い霧にちらつく金の鳥かごが、何故かとても恐ろしく思えた。マリアは汗ばむ手で魔導書を握り直し、唾を飲み込んでこくりと頷く。「よろしい。では、願いの叶え方だが…亡くなつた君の姉を蘇生する、もしくは新たに作るというのは不可能だ。それは悪魔ではなく神の領分だからな。なので……」

悪魔アモンは、そこで一旦言葉を切り、たつぷりと間を取ってから次の言葉を口にした。

「私が君の姉の姿をまねて君の傍にいよう。」

「え……」

先ほどまで脳内で数々の恐ろしい想像を繰り返していたマリアは、その言葉を理解するのに数秒かかった。そして、理解したとたん、体を支える糸が切れたかのようにへたり込んだ。

「わ…私、鳥かごに入れられてペットにされちゃうのかと…」

「君のようなちんちくりんをこの鳥かごに入れるほど、私の審美眼は

腐ってない。ここに入ることを許されるのは、私が美しいと認められた美術品だけだ。」

「じゃあ…私と、一緒にいてくれるの?」

「だから、そうだと言っているだろうに。わかったら、その姉の肖像画か何か——」

その言葉は最後まで続かなかった。なぜなら、みるみるうちに表情を歓喜でいっぱいにしたマリアが、立ち上がるや否やアモンのガス状の体に抱き着こうとしたからだ。

当然、腕は虚しく空を切ったが、彼女の興奮はさめないままだった。

「っ、ありがとう! 私ずっと、一緒にいてくれるお友達が欲しかったの! あなた見た目はちよっぴり怖いけど、やさしいアクマさんのね…!」

先ほどまでのおびえた様子が嘘と思われるような、まじりけなしの笑顔を浮かべるマリア。

高揚、感動、親しみ、感謝。悪魔たるアモンにはあまりにも不似合いな感情を惜しげもなくぶつけられ、アモンはほんの少しひるんだ。そして、相手をするのも面倒くさいと言わんばかりのため息を一つついて、地下室のがらくたからマリアの姉の姿がわかるものを探し始める。

「…友達云々は見間違いだ。私はただ、傍にいと云ったにすぎん。勝手に言葉を拡大解釈するのはよしたまえ」

「カクダイカイシヤ…って、なあに?」

「辞書を引け。」

もしかすると自分は、とても面倒な契約をかわしてしまったのではないか——そんな事を、頭の片隅で考えながら。

第二話

悪魔アモンがマリアの召喚に応じてから、早数十分後。

「…本気か？」

マリアの自室に苦悩の声が響いた。

全身鏡を前にその言葉を発したアモンの姿は、先ほどまでのような黒い霧の塊ではなく、十代半ばを少し過ぎたと思しき少女だった。

夕日に透けて流れるプラチナブロンド。無表情ながら人形のように整った顔立ち。マリアよりわずかに高い程度の背丈。そのすべてが、鏡の横に立てかけられた絵——マリアの姉、レイラの肖像画を再現したものである。口から出るのも先ほどの恐怖の塊のような声ではなく、少女らしい、鈴を転がしたような声だ。

にもかかわらず、アモンの纏う雰囲気は明るいものではない。その理由は明白だった。十余歳の少女を完璧に再現したはずの足の太ももから下は、なぜか細かいグレーの毛におおわれ、足先には五本の指ではなく蹄が映えている。頭の両側にはヤギの耳と、あろうことかぐるぐるとねじ曲がった角までもがくつついていた。ほかに瞳も肖像画のような翡翠色ではなく紫色なのだが、これほどの失敗の前では些細な違いに思われた。

アモンは鏡に映る自分の姿を見ながら、最後に人間に化けたのが軽く数世紀以上前であったことを思い出す。

何度かやり直しを試みたが、足を人間のものに戻すと今度は両手が蹄になり、さらに苦勞して両手を人間のものに戻すと、すかさず背中からコウモリのような翼が生える。どうやら今の自分の変身技術では、体のどこかしらに悪魔としての特徴が出てしまうらしい——それが、試行錯誤を重ねた末にアモンが出した結論だった。

おまけに——

「…君。もう一度聞くが……この姿でいい、というのは本気か？」

「うん、本気よ。だって私、お姉ちゃんも大好きだけれど、ヤギさんも大好きなもの」

「いや、そういう問題では……そもそも、私はヤギではない。これは『悪

魔はヤギのような角や蹄を持っている』という人間の信仰を反映したものだ」

呆れ気味に言いながらアモンは背中を確認する。髪に隠れて見えづらかったが、腰あたりに出来損ないのように小さいヤギの尻尾がくつついていた。

「……うーん、よくわからないけど……でもその格好、劇の仮装みたいでかわいいから、いいんじゃないかしら。」

ここまで素直に認められてしまうと、へたに悩むのが馬鹿らしくなってくる。

「……まあ、暗示でごまかせば違和感を抱かれないだろうし……君がいいならそれで結構。」

しぶしぶ了承する言葉を聞くと、マリアの表情はぱつと明るくなった。

「さあ、そうと決まれば服を決めなくちゃ！下着はお姉ちゃんのお下がりがあるけれど、他はどうしよう？……あ、この薄むらさきのジャンパースカートなんてどうかしら！裾いっぱいにすみれの刺繍がしてあって……」

「却下。」

クローゼットのほうへ歩いて行ったマリアが、これでもかどフリルのついた服を取り出したのを見るや、アモンは半ば言葉を被せるように拒否した。そして彼女が次を取り出そうとする前にすばやく視線を巡らせ、クローゼットの隅にかけられた古いコートに目をつけた。

「よし、これにしよう。」

「え？」

おもむろにパチンと指を鳴らすと、アモンの周りで黒い霧が渦を巻く。あつけにとられたマリアが見守る中、黒い粒子が糸のように縊り合わされ、身にまとう服が下着から順に次々と形成され——最後に、どう見ても子供の体には不釣り合いな、大きすぎる黒コートが体を包み込んだ。

「フム、悪くない。」

満足げなアモンに対し、マリアは見るからに不服そうだ。

「えー……なんだか地味だわ。もっとかわいい格好にすればいいに。」

アモンは不満の声など聞こえてすらいないかのように、コートの中に金の鳥かごをしまい込み、全身鏡で姿を確認している。

「悪くはないが……顔がすべて見えているのは落ち着かん。」

そして再び指を鳴らすと、今度はつばの広いとんがり帽子が頭にかぶさった。

「えー!!!」

一気に顔の半分ほどが影になってしまったアモンに、不満の声の音量が倍増するが、やはりアモンは意に介さなかった。

「服についてまで得手勝手に意見される筋合いはない。契約の範疇外だ。……さて、次は名前だが。」

難しい言葉を使われると反論のしようがないマリアは、せめてもの抵抗として両頬を膨らませたが、アモンに口にクルミを詰め込んだリスを連想させるだけに終わった。

しばしの沈黙の後、根負けしたマリアが口を開く。

「そのままアモンって呼んじゃだめなの？」

「駄目だ。よほどの馬鹿でない限り悪魔の名前だと察する。ヨーロツパ中、君のような者ばかりならバレないのだがね。」

「わかった、それじゃあ私がすてきな名前を考えてあげる！」

皮肉を言われたことに気づかないまま、生き生きとして紙とペンを取ってくるマリア。

「えーと……アモンって、A m o nよね。じゃあ、アムとか……アーモ……ナム……うーん」

そしてたっぷり五分は思案した後、ふと顔を上げる。

「……マーモ。マーモっていうのは、どうかしら！」

うきうきとした顔で提案されるが、アモン本人としては、偽名などどんなものでも構わなかった。

「それで結構。」

「やったあ！きつと気に入ってくれると思ったわ。」

——いや、べつに気に入ってないが。アモンはそんなことを思った

が、特に言う必要もないので黙っていた。

「それじゃあ…改めて。よろしくね、マーモ。」

マリアは、名前を呼ぶだけでうれしそうに声を弾ませながら手を差し伸べる。しかし、その手が握り返されることはなかった。

「…マーモ？」

代わりに掌の上に置かれたのは、一枚の金貨。表面には、幾何学的な模様と英文字が精巧に浮き彫りにされている。それはシジルと呼ばれる、それぞれの悪魔に固有の印章のような物なのだが、当然マリアは知る由もなかった。

「握手はまだだ。先に契約の仕上げをしなくてはね。」

「仕上げ？」

「そうだ。契約の終わり…：…いつ君の魂を頂戴するかについて、まだ決めていなかっただろう。」

——むしろ、私にとってはこれ以外どうでもいい。

アモン、改めマーモは心中でつぶやき、マリアの表情を伺い見ると、彼女の表情に恐怖の色はない。ただ大きな翡翠色の目に金貨を映して、不思議そうな顔で呆けているだけだ。悪魔に魂を喰われることの意味——命を落とし、天国にすら行けぬまま消滅することの恐ろしさを理解するには、この少女はあまりに幼かった。

それを確認して満足すると、マーモは金貨に指を乗せる。すると、指の触れた部分から広がるように金貨がじわじわと輝き始めた。

「それでは…：…これより正式に契約を取り結ぶ。『悪魔アモンは、召喚者マリア・ハリントンの望みに答え、その姉の姿で彼女の傍にあり続ける。そして——彼女が『もう寂しくない』と口にしたとき、対価としてその魂を一片残らず喰らうだろう。』」

教会の説法の如き厳粛な調子で言葉が響く。契約というものの重要性をよくわかっていないマリアも、思わず背筋を緊張させて聞き入った。部屋が再び静寂で満たされると、同時に手の上の金貨は一層輝きを増し、恒星と見間違うほどになったかと思えば、ゆっくりとマリアの手の中へと沈んでいった。

ずっとぼんやりと見守っているだけだったマリアが、そこで初めて

驚きに声を上げる。

「え……えっ!? うそ、どこ行っちゃったの!?!」

「君の中に。別に肌身離さず持つているだけでも構わんのだが…子供はすぐ物をなくすからな、この方が良かる。」

「へえー…」

いまいちピンと来ていない顔で手の甲をさすつっていると、おもむろにマーモが手を差し出した。

「さて…これでようやく、握手もできるといふものだ。精々、私を退屈させないように励んでくれたまえ。」

帽子のつばの陰から吸い込まれそうな紫色の瞳に見つめられたマリアは、初めこそきよとんとしていたが、すぐに日だまりの花のような微笑みを浮かべてその手を握り返した。

「ええ、もちろんよ!」

孤独で偏屈な悪魔と純真無垢な少女。この奇妙な契約の成立を、夕日に輝く金の鳥かごだけが見守っていた。

第三話

地獄の最果て、死者の嘆きも悪魔の笑い声も届かぬヒヌノムの谷底こそが、七つの大罪の悪魔たるアモンの住処だった。

光の届かぬ谷底が薄ら金色に光って見えるほどの金銀財宝、珍品名品がそこらじゅうに無造作にちりばめられているにも関わらず、そこへ寄り付こうとする者は時折空を横切る大蝙蝠を除いては皆無に近い。時折財宝を狙って訪れる不届き者は幾重にも張り巡らされた防御魔術に阻まれ、運よくそれを超えた者も、財宝の輝きで暗闇に照らし出される紫の瞳のひとにらみで、皆逃げていくのだった。

そして、アモンがその財産を実際に使うところはおろか、どこかへ持ち出すところを見た悪魔さえ、地獄には一人としていない。

宝物庫の番人。莫大な財産を使うこともせず、頑なに人に奪われまいと守っている、強欲の化身のような悪魔——アモンは、侮蔑と畏怖を込めてそう呼ばれた。

もともと、多くの悪魔に広まっている認識とは異なり、アモンにとっては谷底をきらびやかに飾る億万の財宝など土くれ同然の価値しかなく——この悪魔はただ、自分の“宝物”を入れた小さな金の鳥かごを守っているだけなのだ。

牡鹿を精巧にかたどった銀細工。古代エジプトの装飾鏡。完璧な均衡を保つ天球儀。果物の籠を抱えた夫人の肖像画。色も形も様々な宝物の共通点は、アモンが心からその美しさを認めたことだった。

そして、これまでアモンの生きてきた数千年は、時折人間の魂を取ったり趣味の読書をするものを除けば、ほぼ全てがこれらの宝物を眺め、美しさを愛でることに費やされていた。人付き合いを嫌うアモンの世界は、深い谷底の小さな鳥かごの中だけで完結している。そして彼自身も、その傍目には退屈な日々に充足しきっていた。何しろこの悪魔の価値基準では、鳥かごに収められた宝物の数々は、たとえ世界のすべてを天秤にかけても釣り合わないほど尊いものだったのだから。

そんなアモンなので、自分を召喚しようとする数々の人間の中でひ

ときわ幼い少女の情念に答えてやる気になったのも、他者との交流とか新たな事への挑戦というような殊勝な目的からではない。ただ、書店で読みなれない類の本を手にとってみるような些細な好奇心から、「善良で無垢な人間の少女」という自分にとって未知の生き物について知識を増やすのもいいか、と思つたに過ぎなかつた。

ただ——ほんの少し、ほんの少しだけこの少女に、見慣れた世界に変化を与えることを期待していたのも、また事実だが。

そして、現在。

マーモは椅子の背もたれに身を預け、降りしきる雨の音を聞きながら午後の読書を楽しんでいた。背後に影のように控えるメイドが紅茶を出そうとするが静かに首を振つて断る。

一家で暮らすには少し広すぎるが、派手過ぎず品のいい街はずれの豪邸。その中でまるで切り貼りされた絵のように明確な違和感を放つマーモは、当然のようにハリントン家の日常に居座っていた。隠そうともしない特異な容姿にも、見た目に似合わぬ年寄りじみた雰囲気にも、疑問を感じる者はいない。

これはもちろんマーモの暗示によるものであり、使用人のみならずこの家の者はマリアをのぞいて全員、「マーモは遠縁の親せきで、不幸にも両親が相次いで病死したためこの家に養子に出された」という体のいい設定を信じ込んでいる。

亡くなったマリアの姉、レイラと容姿が瓜二つなこともあつてか。養子であるにも関わらずマーモの待遇はやたらと良く、わざわざマリアの部屋の隣に自室まであてがわれた。

かくしてマーモは、何の問題もなくハリントン家に紛れ込むことに成功し、時間がゆつくりと進む午後の一と時に平穏な読書を楽しんでいるのだつた。

しかし、両開きのドアを勢いよく開いて駆け寄ってきた少女、マリアにその平穏はいともあっさりとは破壊される。

「ねえマーモ、聞いて！。パパがおみやげに勝ってきてくれた缶入りのクッキー、あんまり美味しくてもう半分も食べちゃったの！」

突然の騒音に山羊の耳がドアのほうを向く。マーモは、戦利品を見せるように得意げな様子で小さなクッキー缶を見せながらキヤツキヤとはしゃぐマリアを見て深いため息をついた。そして、ついこの間まで実体がなかった自分が、すでに「ため息をつく」という行為に慣れつつあることに気づいて更にげんなりする。

「ねえマーモ、このケーキを半分こしましょうよ。」

「ねえマーモ、あなたが読んでる本ってどれも字がいっぱいね。私にも読めるかしら？」

「ねえマーモ、庭にカササギが巣を作ってるの！」

召喚からたった一週間の間だけで、すでに耳にタコができるほど「ねえマーモ」という言葉を聞き続けている。ついにはこの少女がいないところでもこのキンキンと高く響く声が耳にこびりついて聞こえるようになってきたので、マーモはこれを言われるたびにこれ見よがしになるべく大きなため息をついて、最大限そっけない対応を返すようにしているのだが、そんな繊細な嫌がらせが子供に通用するはずもなかった。

「せっかくだからマーモも食べてみない？はちみつがいっぱい入ってて、ほっぺたがとろけるくらい甘いよ。」

粉まみれの手で無邪気にクッキーを差し出してくるマリアは、そんな苦悩など知るはずもない。マーモは本から顔を上げることもなく口を開いた。

「結構。そもそもこの間話しただろう、私の食事は人間の魂、それと負の感情だけだ。人間の菓子などを口に入れても何の足しにもならん。どぶに放り捨てているのと変わらんよ。」

極めてそっけないマーモの言葉に、マリアはしばらく難しい顔をして「うーん…」と悩んだ。

「でも…お腹いっぱいにならなくても、おいしいって思ってもらえれば、私は嬉しいな。それに…」

「それに？」

「せっかく人の姿になったのに、お菓子のおいしさを知らないなんてもったいないじゃない？」

マリアは屈託なく言うと、再びクツキーを差し出して首をかしげる。マーモはしばらくその小さな手のひらを見つめていたが、すぐに本を閉じて席を立った。

「君の価値基準で私にあれこれと指図される覚えはない。」

そのまま踵を返したマーモが何か言われる前に立ち去ろうとした時、ふいに二階から物が割れる音と何人かのメイドの焦った声が響いた。山羊の耳がくるりと音の方向を向く。

「っ、ママ……！」

その音を聞いた途端、マリアの顔から瞬く間に笑顔が消えていくのがマーモの目に映る。そして、はじめたように立ち上がると、クツキーには目もくれずに声のする二階へと駆けていった。

残されたマーモは、開きっぱなしになったドアを見てかすかに目を細めた。

マーモがマリアを追って二階へと上がった時、ちょうど上品ないでたちの夫人が、階段の前でメイドやマリアと押し問答をしているところだった。

「何度も言っているでしょう、レイラがいなくなったのよ！ああ、きつとあの子、お父様の帰りが遅いからって、町まで見に行ったに違いないわ！こんなに雨も降ってるのに…、すぐにでも探しに行かないと！」

レイラがいなくなった。不安と焦燥をにじませた声でそう叫ぶ夫人は、マリアの母親でありハリントン子爵の妻、エルザだった。美しい金髪が乱れているのにも構わず、取り乱しきった表情で話す彼女の瞳には涙がきらめいている。

しかしレイラとは誰だったか。しばしの間記憶を辿ったマーモは、レイラというのが自分の今の姿のモデルになった少女、すなわち亡くなったマリアの姉であることを思い出す。そして、もう一度エルザ夫人のほうへ視線をやった。

我が子を想って涙を流すその表情には不自然さも狂気も感じられ

ない。この貴婦人は、とつくに死んだはずの娘の安否を心配するといふ矛盾した行為に、少しも違和感を感じていないようだった。

「ですが……ですが、レイラお嬢様は……!」

そこまで言つて耐えかねたように言葉をつまらせたメイドは、自分の主人がどこにもいない娘を捜し歩いて濡れ鼠になるのを何とか止めようと必死に押し問答を続けている。それでも一歩も引きさがる様子のない彼女がいよいよ階段を駆け下りようかという時、ほんの一瞬うつむいて唇を固く引き結んだマリアがそちらに歩み寄るのがマーマの目に映った。

「大丈夫よママ、お姉ちゃんは今朝から具合が悪くって部屋で寝てるの。後で私があつたかいレモネードを作つて、持つて行ってあげるのよ!だから、ママは心配しないで?」

次に顔を上げた時、マリアの顔には先ほどの表情など影も形もなかった。母の両手をとつて優しく語りかけるその顔は、先ほどマーマに見せたのと同じ人を安心させる柔らかな笑顔そのものだ。そうして腰に抱き着いたマリアがちよつと首をかしげてそちらを見上げると、先ほどまで頑として譲らなかつたエルザも、ようやくわずかに平静を取り戻した。

「…あら、あらあら。そうだったかしら?御免なさいね、最近レイラの姿が見えないととても心配になつてしまうの。どうしてかしらねえ、あんなに元気なのに……」

まだどこか腑に落ちない様子でしきりに首をかしげながら寝室に戻つていく母親を見送つて、ほつと息をついた少女を、アモンは遠巻きに観察していた。

第四話

——心の病、か。

騒動も収まり、日も暮れかかったころ。マーモは自室で精神病について書かれた分厚い医学書を捲りながら内心でつぶやく。性懲りもなく遊びにきた MARIA が本を机の上に積み上げているのだが、眼中に入っていない。先ほど階段で見たような光景はどうもこの屋敷では格段珍しいことでもないらしく、一年前にエルザが「発症」してからは、大なり小なり毎日同じような騒動が繰り返されていると聞いた。夫のバーナビー氏は、愛する妻が精神病院とは名ばかりの監獄に閉じ込められることを許さなかったため、数日に一回はレイラの姿が見えないと喚く彼女と使用人や MARIA との間であのような騒ぎが起こるらしい。だが、それをマーモはが目にするのは今日が初めてだった。

——娘の死を受け入れられず、現実を否定したいと思うあまり幻覚を見る。確かによくある話だが：

声高に娘の名を呼ぶエルザ夫人のあの目が、なぜかマーモの脳裏にこびりついて離れなかった。

考え疲れて一旦思考を中断すると、視界にようやく MARIA の姿が入ってくる。ふとマーモは先ほどのことを思い出した。

「そういえば——随分と演技達人なようだな。」

「え？」

「先ほど、君が母親にやっていたことの話だよ。その年のわりには作り笑いが随分とうまい。頭が砂糖でできた馬鹿かと思っていたが、妙なところで小賢しいものだ。」

机にあごをのせて山と積まれた本のタイトルを読むことに腐心していた MARIA は、はじめ何の話をされているかまるで分っていない表情できよとんしていたが、しばらく考えてようやく合点がいったように頷いた。

「…うーん、自分ではうまく笑えてるかわからないけど…、マーモが褒めてくれるなら、ほんとに上手いのかも。…あ、もしかしたらママ譲りかもしれないわ。ママってああ見えて、昔はすごい女優さんだった

のよ？お姉ちゃんが生まれた時にやめちゃったらしいから、見たこと
はないけれど。」

ほら、と言いなながら黄ばんだ新聞紙の切り抜きをこちらに見せてく
る。表情こそ笑顔だが、その声音からはどこか無理をして明るく振
舞っているようなわざとらしさが滲み出ている。

しかし、マーモの見透かしたような視線に射抜かれると、きまりが
悪そうな笑顔で視線をあちこち彷徨わせ、そしてゆっくりと下をむい
た。

「……でも…私はやつぱり、嘘をつくのって苦手。なんだかママに悪
いことしてるみたいで、胸がちくちくするし、それに……」

そこまで言葉を吐くと不意にマリアはうつむいた。次の言葉を言
いあぐねているかのように、その口がのろのろと開閉する。中々話の
続きが切り出されず、随分と長い間沈黙が部屋を包む。時計の短い針
が一周しようかという時、とうとう痺れを切らしたようにマーモが椅
子から立ち上がった。

「……ああ全く、いつまでそうしている気だ？君の家の者ならとも
かく、悪魔相手に何を気を使うことがある。私は本の続きを読みたい
んだ。吐きだしたいことがあるなら、好きなだけ言うだけ言ってさっ
さと消えてくれ。」

心底煩わしいというようにシッシと手を振ったマーモは、反応を伺
おうと帽子の下から視線を送る。そして、その表情を見てわずかに面
食らった。なぜなら、マリアの大きな瞳にみるみるうちに涙が溜まっ
ていき、溢れて頬を流れ落ちるさまがありありと目に入ったからだ。

「あの、…あ、あのね、私……ママにうそをつくたび、お姉ちゃんのこと
と思い出すの…っ、……こういう時お姉ちゃんはどうしてたどろ、何
を言っただろうって…。わたし、わたし…それが、すごく、つらくつ
て………お姉ちゃんはまだ居ないんだって、思ったらあ……」

ぽつりぽつり、何度もしゃくりあげながら紡がれた言葉は、おそら
く随分前からマリアの心の奥底に秘められていた弱音だった。一度
せきを切ってあふれ出した感情はとどまることを知らず、ついには
マーモの肩に抱きついてわっと泣き出した。

「でも、…ッ、でもね、ママもパパも家の人たちも、…私よりもっともっと、何倍もつらそうなの…。わたし、子供だから、パパが話してのようなむずかしいことは、わかんないけど…。だから、…っ、おねえちゃんもいないし、…だ、誰に話していいか、わかんなくて…」
途絶え途絶えに、途中からは何を言っているかもよくわからないような言葉を吐き終えた少女は、あとはただ泣きじやくるばかりだった。縋りつかれているマーモの方はと言えば、ただただ困惑してこの少女を見つめながら、されるがままで棒立ちになっていた。途中、何度かやんわりと引きはがそうと試みたが、嫌々と駄々つ子のように首を振ったマリアがより一層強くしがみつくだけだったので、すぐにあきらめた。

マリアは涙が止まってからも、随分と長いことマーモの肩に顔をうずめて小さな声でしゃくりあげていた。ようやく落ち着いてマーモから離れたのは、もう日も完全に暮れてからである。長い間部屋に居座ってしまったことと、コートを濡らしてしまったことを謝ったマリアの顔は、目が真っ赤に腫れていたが、どこか晴れやかだった。

マーモは、元氣を取り戻して走り去っていく背中を見送った。その姿が見えなくなったとたん、嵐が過ぎ去った後のような壮絶な疲労感が肩にのしかかる。ほとんど後ろに倒れこむように背後の椅子に沈み込むと、ぼんやりと天井を見上げた。

——どうでもいい。

屋敷の人々の不幸も、快活なマリアが内に秘めていた悲しみも、マーモにとつては全くどうでもよかった。人間の嘆き、悲哀、嫉妬、懊惱。それらは悪魔にとつては、皆等しく食料。いくら弱音を吐かれても共感などできるはずもない。

だというのに。

「ありがと、明日からはちよっぴり元氣な私に戻れる気がする。——
…マーモがいてくれて良かったわ。」

そんな言葉を吐いて去っていったマリアの声音は、憑き物が落ちたように軽かった。

あの時のマリアの感情が何なのか、マーモにははつきりとわからない

い。だが、また心に問題を抱え込んだとき、あの少女は必ず自分の元へ来るだろうという嫌な確信があった。

涙を流すマリアにずっと触れられていた時のぬくもりが、今もまだ体に残っている。それは谷底の冷たい暗闇に慣れたマーモにとって、火傷をしそうなほどの熱だった。

——全く、心底煩わしい。

何度か頭を振って、ぬくもりの感覚を振り払う。これなら嫌われるか恐れられるかした方がよほど楽だ。能天気な微笑みかけてくるマリアの笑顔を思い出しながら、マーモは心中でぼやく。

——いっそ、本当にそうしてしまおうか。

ふいにそんな考えが頭をよぎる。あの少女に何をしようが、魂さえ取らなければ契約には反しない。殺さずに苦しめる方法などこの世にはいくらかでも存在するのだ。あの少女を怯えさせ、傍にいたくないと思わせれば、契約を自ら終わらせるように仕向けることもできる。

考えれば考えるほど、これはいい方法であるように思われた。マーモはほかの悪魔と違い、契約の穴を突いて相手を騙すことをあまり好まなかったが、そんなことを忘れさせるほどに、あの少女にこれ以上踏み込まれることを拒む気持ちが強かったのだ。

第五話

その日から、マーモは毎晩マリアに悪夢を見せ始めた。内容は至極単純。マーモが本物のレイラのように優しい微笑みを浮かべて歩み寄ったかと思うと、突然悪魔の姿に変貌してマリアを惨殺するというものである。

霧状の体を鋭利な刃に変化させ、心臓を貫いた。細い糸を何重にも首に絡め、じわじわと絞め殺した。逃げまどう足を捕らえて何度も地面に叩きつけた。頭蓋骨を西瓜のように砕き割った。より具体的に、現実的に、身もすくむような恐怖を全身で感じられるように。毎夜毎夜、ありとあらゆる手段でマリアを殺し続けた。毎日それを繰り返すうち、マリアの目の下にはうつすらと隈ができ、昼間も眠たそうに眼を擦ることが多くなっていたが、マーモへの態度にはほとんど変化はなかった。

そして十四日が経った日、マーモは悪夢の内容を現実再現するこ
とにした。

——何も本当に殺すようなまねをするつもりはない。ただ、夢の恐怖を現実のものとして、存分に体感させてやるだけ。それで十分だ。

家じゅうが寝静まった深夜、マリアの部屋の扉を細く開く。廊下の薄明かりが扉の隙間から入り込み、床に光の線が走った。一步、また一步と硬い蹄が床を踏みしめる。薄膜のようにベッドを覆うレースの天蓋を捲ると、マリアは行儀よく布団の中におさまってくうくうと寝息を立てていた。

——どこまでも、呑気な小娘だ。

枕元に佇んだマーモは、奇妙な苛立ちとともに穏やかな寝顔を見つめた。

その上半身の左側が割けるように黒い闇が溢れ出し、元の悪魔としての姿に戻っていく。しかしその変身が最後まで続くことはなく、少女と怪物をいびつにつなぎ合わせたような見た目になったところで、体から溢れた闇は蠢くのをやめた。

悪魔の左目と少女の右目が、月光よりも冷たくマリアを見下ろす。

そして、左腕だった部分の闇を、ゆっくりと細く長く伸ばし始めた。静寂の中、マーモの黒い左腕はさながら鎌首をもたげる蛇のように少女へと忍び寄っていく。そして、その首に手がかかろうとした時——不意に蹄がベッドの角に当たった。衝撃で寢床がわずかに軋み、マリアの目がうつすらと開く。

「——だあれ？」

寝ぼけ眼をこすりこすり、ゆっくりと起き上がろうとしたマリアは、顔の前に伸びた黒い手に気づいて不思議そうに顔を上げる。そして——眼前に佇む異形を見た。

マリアの姉、レイラを模して造られた少女の体は、綿のはみ出た人形のように全身のあちこちが割け、漏れ出した黒い闇が不気味に揺れている。廊下の光が逆光となってその顔は深い影になり、ただ紫の瞳ばかりが闇に輝いていた。

長い沈黙の中、マーモは変わらぬ表情のままマリアの反応を観察していた。

マリアはその姿を見つめ、見つめ、見つめ——そして、不意にマーモが思いもよらなかつた行動に出た。

「……なんだあ、マーモか……ふふ。」

へにやりと気の抜けたように口元を緩ませると、おもむろに眼前に伸びた黒い左腕を掴んで再び枕に頭を沈ませ、そしてあろうことか、マーモの腕を至極大事そうに抱きしめたまま再び眠りについたので。

そう時間をかけずに再び寢息が聞こえ始めてからも、マーモの頭は目の前の状況に追いついていなかった。異形の腕を抱え込んで眠る少女の表情は、先ほどよりも安らかにさえ見えた。そしてようやく状況を理解したとたん、マーモは全てが馬鹿らしくなった。なぜならこの数日間やってきたことの全てが、まったくの無意味だったと悟ったからだ。

マリアは自分に対して微塵も恐怖心を抱いていない。この少女が演技達人なのは最近知ったが、先ほどの態度が演技でないのは、負の感情を主食とするマーモには明らかだ。だが、分かつて尚、不可解だった。

——何故だ？何故怯えない？恐ろしくないのか、私に殺されること
が。

心の中でつぶやき、今までのマリアの行動を思い返す。そしてすぐ
に自分の問いを否定した。

——この少女は決して死を恐れていないわけではない。契約の折
に鳥籠をちらつかせて脅かした時は、確かに腹の底からの恐怖をこち
らに向けていた。

「ならば、何故恐れない…？」

気づけばそう口に出していた。もちろん返事は帰ってこず、マーモ
の独り言は夜の静寂に吸い込まれて消える。

「…馬鹿馬鹿しい。」

フと我に返り、大きくため息をつく。マリアの腕の中から左手を引
き抜くと、少女の姿に戻った。そして、頭に浮かんだ様々な感情を振
り払うように踵を返し、その場をあとにする。

——気のせいに決まっている。左手に残る熱を、ほんの少しだけ心
地良いと感じたなんて。

？

窓から差し込む日の光の眩しきで、マリアは目を覚ました。

随分と久しぶりに夢を見ることなく熟睡した気がする。マリアは
寝起きでだけだるい体を起こし、昨晚両手に抱いていた何かがなくなっ
ていることに気づいた。一体それが何だったのか、一生懸命に思い出
そうと試みたが、真夜中の記憶は霧のように曖昧で、はつきりとは分
からなかった。

「何故恐れない？」

不意に脳裏にマーモの声が響く。確かにそんなことを聞かれたよ
うな気がするが、その経緯はやはりよく思い出せない。もしかする
と、やっぱり夢を見ていたのかもしれないとマリアは考えた。

ぼふ、と先ほどくるまっていた布団に倒れこむ。まだ体温が残る布
地に包まれながら、マリアはもう一度先ほどの言葉を反芻する。

——何故恐れない、かあ…

どうしてマーモがそんなことを聞いたのかはマリアにはわからな

かったが、その声はいつもの淡々とした冷水のような口調とは違い、はつきりとした戸惑いや困惑を含んでいた気がした。

——ねえ、マーモ。私ね、最初からあなたのことが怖くなかったわけじゃないんだよ。初めてあなたと会ったときは、ぎよろぎよろした大きな目がおっかなくて、うまく喋れなかったもの。それに、マーモはお姉ちゃんの姿でも、ときどきすごく怖いことを言うことがある。そして、それは多分冗談なんかじゃない。

でも、でもね。私はあの日、確かに救われたんだよ。

お姉ちゃんがいなくなつて、ママがあんなことになつて。家の中がどんどん居心地が悪くなつて、でも私にはどうすればいいのかわかんなくて。つらくてもだれに言えばいいかもわかんないから、毎日一人で泣いてたの。だから、あなたが傍にいるって言ってくれて、どんなに嬉しかったか！

あの日から、マーモは私にとって大事な大事な友達で、家族なんだ。だから——いくら悪い夢を見たって、ちっとも怖くなんてないよ。マーモは私のこと、あんまり好きじゃないのかもしれないけど——いつかマーモの笑った顔が見られるように、もつともつと仲良くなりたいな。

不意に扉をノックする音が響き、マリアはゆつくりと体を起こした。

「いつまで寝ている。朝食のベーコンエッグが冷え切るまで起きないつもりか？」

ドア越しに聞こえてくる、不愛想極まりない声。それを聞くだけでマリアの口元には笑みが浮かんだ。大急ぎで上着を羽織り、ベッドから飛び降りる。

「待ってて、今行くから！」